家庭における父親の食育への関わりに関する研究 2015 年度報告

林　薫

本研究では、子育て支援の観点から、家庭での父親の子どもの食育への関わりと時代に伴う変化について先行研究を元に分析を行う事を目的に研究助成を申請した。研究結果は以下の通りである。

1）父親の子どもの食育への関わりの現状

ベネッセ教育総合研究所の、首都圏の就学前の子どもを持つ父親を対象とした調査では、今以上に家事・育児に参加したい父親は増加しているものの、「子どもとの接し方に自信が持てない」比率が増加していることが報告されている。また、子どもと一緒に食べる、いわゆる共食についてみると、平成 26 年国民健康栄養調査の結果では、男性 20 歳代 37.0％、30 歳代 29.3％、40 歳代 21.9％であった。會退らは朝食の子どもとの共食と父親の育児参加と大きく関連し、父親の育児参加が積極的である程、朝食での子どもとの共食度も高くなる可能性を指摘している。忙しい朝の時間帯での共食は母親と子どもだけの問題ではなく、父親も大きく関与してくるのは当然であろう。及川らは、本来、自分でやるべきことではない不慣れな育児、というやらされ意識のジレンマやストレスを父親自身が発散できる場、相談する場が少なく、育児する父親を孤立させているのではないだろうかと指摘する。そうしないためには、先輩パパや、思いを共有できるパパ友達との交流の場を提供し、多くの意見を交わし、孤立感を軽減していくことが大切であり、現在の子育てに即した新たな父親モデルを模索する機会を提供する必要があることが報告されている。今現在の子育て世代は、父親の子育て態度や、父親が食事を作るなどの姿に接する機会が少なく、父親が子育てや食事作りに係わるモデルが想像できないとも考えられる。従って、より身近に具体的なノウハウを習得する場が必要であることが考えられた。

2）父親を中心と子育て支援事業の現状

地方公共団体における父親を対象とした子育て支援事業を分析した報告には、子どもと一緒の活動では遊びの他に、工作、体操、クッキングがあり、その他にも離乳食講座等の学習会や、料理教室のような自分自身の活動が実施されていることが示されている。近年では、学習会や講演会が少なくなり、子どもと一緒に遊んだり、工作をしたり、父親同士の情報交換をしたりといった、父親参加型の能動的なワークショップに変化していることが報告されている。父親に対する子育て支援プログラムやサークルは、週末を子どもと父親で楽しむという「子育てのレジャー化」が多く見受けられ、イベント的で補助的な育児支援が典型的である。今後は父親に家事や育児の具体的な内容や手順を示していく取り組みを積極的に位置づけるべきであることも示唆された。

子どもたちを取り巻く問題に的確に対応していくためには、保育所をはじめとした多様な社会資源が教育力を総合的に向上させていくことが課題である。そのため、保育所が給食とそれを食べる場を継続的に提供しているという特徴を活かした活動を家庭にむけて展開し、家庭の中に還流させることにより、子ども自身の育ちを支えるだけでなく、同時に保護者が意欲を持って生き生きと子育てし続ける力、そして生き生きと生活していく力を育むことを目指していきたい。今後は保育所の給食を通して、子育て家庭の父親を中心とした食育プログラムの検討を行っていく予定である。